

小島蓉子先生のこと

長野大学 中村 佐織

昨年の3月19日、大学の卒業式から戻って、自宅で聞いた留守番電話で小島蓉子先生の急逝を知りました。はじめ、その電話を聞き「こじま先生ってどなただろう？」と思うほど蓉子先生と訃報とが結びつきませんでした。

先生との出会いは、私が日本女子大の大学院に入学した時からです。大学までは地元の北海道を出たことがなかった私に入学式前に1通の手紙をくださいました。その手紙には先生の特徴ある字で（今ではとても懐かしいのですが）風呂は付いていないが、無理を言わなければ姉のアパートが空いていること、また使っていない食器類があるので必要ならば取りにくることの2点が書かれていました。当時の私には東京に知り合いもなく、とても心細く不安でしたので、すぐに先生のご好意に甘えることにしました。そして、上京早々、麴町のマンションでお会いしたのです。実は入学試験で、すでに先生とはお会いしていた筈でしたが、私にとって試験の日は緊張していたので、この時が初対面という気がしています。また、その時の先生はちょっと高めの声にはっきりした口調でお話をされていて、とてもエネルギッシュな先生という印象を受けた覚えがあります。

あれから、11年。小島蓉子先生には本当にいろいろ教えていただきました。特に、先生の日々、研究に邁進されてきた姿勢や学生教育に情熱を注がれてこられたことは、やっと研究教育の場でスタートし始めた私にとって、とても大きな目標となっています。研究室で先生の仕事をお手伝いしていた時、先生の専門はもしかして国際福祉や社会リハビリテーションではなく社会福祉教育じゃないかしらと思ったことがありました。なぜかという、先生はとて授業計画や教育プログラムを立てることがお上手だったからです。かつ、アイデアが豊富で、思いついたらすぐ実行に移されていました。そして、一緒にお手伝いしたそのときの経験は、今の私にとってとても勉強になっていることばかりです。

しかし、本当に当時の先生はお忙しかったと思います。口癖のように「寝る時間がないのよ」とおっしゃっていました。また、よくこんなことがありました。11時過ぎ、布団にもぐってうとうとしているとリンと電話のベルがなり、受話器から明日の仕事の段取りが話され、「それじゃさよなら、ごめんください」という先生の元気なあいさつで終わることがよくありました。それほどいつも夜遅くまで仕事をされていたと思います。

このようなお忙しい研究生生活の一方で、プライベートではまわりの人たちにとても気を使われていたことを思い出します。その一つはとても筆まめだったことです。まめにお手紙や葉書を書いていらっしゃいました。そして、外国便や私的な内容の手紙には、記念切手を貼ってお出しになっていました。そのため、机の引き出しには常に買い置きされた記念切手が入っていました。また、奇麗な包装紙などはとっておいて、外国に行かれた時に買われたプレゼントをラッピングしてお渡しになっていました。このような心遣いで手紙やプレゼントもい

ただいた方は多いでしょうし、私も先生から手紙やプレゼントをいただいた時はとてもうれしかったです。

最後に、まだまだ、小島先生にはいろいろ教えていただきたかった、そして研究をしていただきたかったと思います。しかし、叶わないこととなりました。また、感謝の言葉も伝えられません。これからの私にできることといえば、先生から教えていただいたことを研究教育の中で実践していくことだと先生がいらっしゃらなくなって改めて思っています。